

学校図書館を活用した「読み」を鍛える拠点校事業 実践記録

研究主題

自己の考えを広げ深める子どもの育成
～伝え合う力を育み、生かす授業づくり～

南国市立十市小学校

実践概要： 図書館資料を活用した深い読みから言語活動の充実を図り、言語能力や情報活用能力を高めることで、「伝え合う力」を育成する授業づくりを行った。特に、「単元づくり」や「問い」「思考を深める手立て」を工夫することで、児童が効果的に資料を活用し、主体的・対話的に課題を解決していく姿が増え、それに伴って、読書習慣も形成され始めた。

キーワード： 言語活動の充実、図書館資料の活用、単元づくり、思考を深める手立て

1. 研究仮説

国語科において、自分の考えを形成する学習過程を基本として語彙指導の改善や学校図書館を活用する授業を展開することにより、言語能力や情報活用能力の身に付いた子どもが育つであろう。

2. 実践方法

「考えを形成する過程」の中で、児童がまず自分の考えをもつことが重要であると考えた。そこで、「課題提示の工夫」と「図書館資料を効果的に取り入れた授業づくりの工夫」の2点を重点的に研究し、本校の目指す児童の姿に迫る。

(1) 課題提示の工夫

全ての児童が何らかの考えをもち、その考えの理由を、叙述や体験などから明確にすることができるよう課題提示の仕方を工夫した。

①単元全体を通した課題設定の工夫

単元に、「これならできそう！」「やってみよう！」という思いが生まれる必然性のある課題を設定することで、児童の主体性を引き出した。

②1時間1時間の小さな課題（問い）

全ての児童が自分の考えをもてるようにするためには、考えたいと思う課題、児童が考えやすい課題を設定することが必要であると考えた。

そこで、自分の立場を選ばせる課題や自分の考えに近いものを複数の選択肢から選ぶ等の課題を提示することで、自分の意見とその理由を書き留め、対話や交流活動を行った。

(2) 図書館資料を効果的に取り入れた授業

自分の考えをもつ際、その理由を明確にすることで児童同士の対話につなげることができると考えた。そこで、教科書教材や図書館資料等で読み取ったことを基に、既存の知識や様々な体験と結び付け、理由を明確にして自分の考えを深めることができる授業づくりに取り組んだ。

特に、第三次の活動において図書館資料を活用する場を設定し、第二次までの既習事項や既存の体験と、自分の考えを結び付ける方法の習得を目指した。また、授業においては、それらの考えを交流する場を意図的に設けるよう心がけた。今年

度は、第二次と第三次の間に図書館資料を活用して作った十市小オリジナル教材を使って活動する時間を設け、第二次で獲得した力を使って、第三次に自力で取り組むこと第三次の活動が児童のみの力で行うことができるようにした。

3. 実践内容

年間を通して吉田豊香氏、授業研究を中心に江島敬一氏、片岡忠三氏、久武桂津代指導主事による研修を行い、教職員間の研究の方向性について確認しながら進めた。

(1) 課題提示の工夫

①単元全体を通した課題設定の工夫

単元に「これならできそう！」「やってみよう」と子ども達が思うような課題を設定し、ゴールイメージをもって取り組むことができる言語活動を考えた。

例えば、6年生では、「目的に応じて、文章の内容を的確に押さえて要旨を捉えたり、事実と感想、意見などとの関係を押さえ、自分の考えを明確にしながら読みだすこと」という指導事項のもと、「自分の意見を高知新聞に投稿する」という言語活動を設定し学習を進めた。児童は、

「自分の考えを書いて新聞に投稿する」という課題を解決するために、教科書教材から、より説得力を増すための工夫を学習し、そこでの学びを生かして自分の考えを投書にまとめていった。

また、第二次と第三次までの学びをつなぐ活動として、学級全員で図書館資料を活用した同一資料を使って学習する時間を設けた。

②学習計画表の作成

単元で付けたい力の明確化と、児童が見通しをもって主体的に取り組む言語活動の充実を図るために、「単元の学習計画表」を作成した。〈写真1〉この計画表には、1時間ごとの学びを書き残し、学習のふり返りや前時までの学びの確認等に活用した。

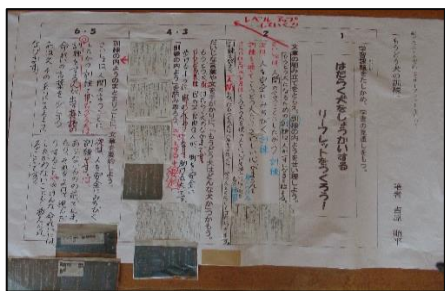


写真1：学びを書き込んだ学習計画表

③問いが生まれる学習課題（発問）の工夫

「児童の問いが生まれる」学習課題として、「AとBを比べよう」「1つ選ぼう」「AとBは同じかな」など「比較・選択・分類」型の課題を積極的に取り入れていった。そうすることで、自然と問いが生まれ、どの児童にとっても自分の考えがもてるようになってきた。また、その理由を文章や資料から見付けて対話できるようにもなってきた。

例えば、「先生のアニマルカードとみんなのカードのちがいは何かな?」「ミャンマーのんびとの生活を説明する写真を二枚選ぼう。」「先生の説明文に資料を使うならどれがよいか?」などの課題が効果的であった。

授業後は、課題設定がどうであったのかチェックシートで授業をふり返ったり、事後研究会で検討したりすることで、今後の授業改善につなげていった。また、重要なポイントについては、研究日より「架け橋」にまとめ、日々の授業に生かせるように発信することで校内の共通理解を積み上げていった。

④領域別系統表や学習用語カードの活用

身に付けたい力を系統的に指導し、確実に定着できるようにするために、国語科の領域別系統表（写真2）や国語の学習用語（写真3）を作成し、全学年の身に付けた力が一目でわかるようにした。

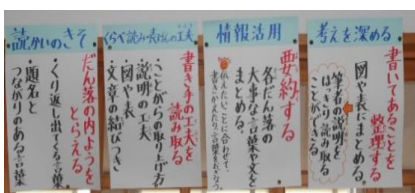


写真2：説明文系統表の掲示

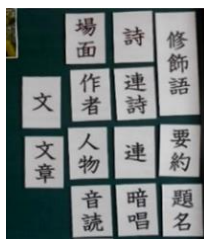


写真3：学習用語カード

(2) 図書館資料を効果的に取り入れた授業の展開

①図書館資料を活用する場の設定

図書館資料等で読み取ったことを基に自分の考えを深める時間を設定した。特に、第三次の活動において、第二次までの学びを生かしてその単元の言語事項の定着を目指した。また、意図的に自分の考えを交流する場を設けるよう心がけた。今年度は、第二次と第三次の間に図書館資料を活用して作った十市小オリジナル教材を使って活動する時間を設け、第三次の活動が児童自身の力で行うことができるようにした。

例えば、2年生では、図書館資料を参考にして作成した自校教材「狩りをするハシビロコウ」（写真4）から、教科書教材の学びを生かしてハシビロコウのひみつを見付け、アニマルカードを作成した。3年生では図書資料「湖上のバンブーハウス」のミャンマーの文章や写真から人々の生活を読み取り、説明文を仕上げた。

この時間は、第二次から第三次への橋渡しの役割となり、これまで目的に合った文章や言葉・資料を見付けることができなかった児童も、スムーズに第三次の活動に取り組むことができ、主体的に取り組む児童の姿が多く見られるようになった。また、児童同士の対話も生まれてきた。

授業で作成した児童の作品は、廊下や掲示板に置き、全校に学びを広げていった。（写真5）



写真4：2年生自校オリジナル教材「狩りをするハシビロコウ」



写真5：図書館館内や廊下などに掲示した授業後の成果物

②学校図書館や新聞の効果的な活用

学校図書館を活用した授業年間計画に基づき計画的、系統的に図書館資料を活用した。また、図書担当との連携を図り、国語科だけではなく、他教科等につなげていくことができるように工夫した。

特に、以下の3点については全校で取り組み、言語能力、情報活用能力の育成を図った。

- 国語辞典・百科事典の引き方手引の作成・活用による調べる力の育成（写真6）
- 「学校新聞づくり」「読書感想文」「読書感想画」コンクールへの取組・参加（写真7）



写真6：辞書引きに取り組む児童の様子



写真7：新聞づくりの取組の様子や掲示物

③語彙を豊かにするために行った指導

授業の導入時にブックトーク〈写真8〉を行い、興味・関心を高めたり、「ブックコーナー」〈写真9〉を学年の廊下に設置し、第三次に活用する本や図鑑などを並行して読めるようにしたりした。

また、図書の時間を使って、国語辞典や図鑑・百科事典の使い方など情報活用のスキルを身に付ける学び方指導〈写真10〉を行い、資料を探す力、調べる力を高め、情報活用力や言語能力を育てていった。そして、第三次で発展的な学習として、図書館資料を活用した授業を行った。〈写真11〉



写真8：授業の導入時のブックトーク



写真9：学年廊下に設置したブックコーナー



写真10：図鑑での学び方指導



写真11：図書館資料を活用して対話する児童

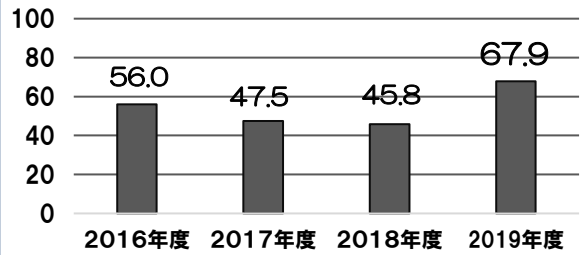
4. 成果と課題

①読解力、情報活用能力の向上

今年度は、第三次の発展的な学習の前に学級全員で中心教材以外の同一資料の活用に取り組む時間を設けた。そのため、第三次の活動では、図書館資料を活用してスムーズに自らの課題に取り組む児童の姿が多く見られた。また、国語科で育んだ活用力と総合的な学習の時間に培った学びを相互に関連させた「教科等横断的な単元づくり」も目指した。その成果として、全国学力・学習状況調査「国語科」における正答率が全国平均より3.2ポイント、「読むこと」の領域においては7.0ポイント上回った。情報活用のスキルが身に付き始め、資料を活用して自分の考えを整理して伝え合う児童の姿や、目的に合った資料や文章を活用する児童の意識も高まっている。〈グラフ1〉

5年生までに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していたと思いますか

(肯定的な評価の割合)



グラフ1：児童質問紙より

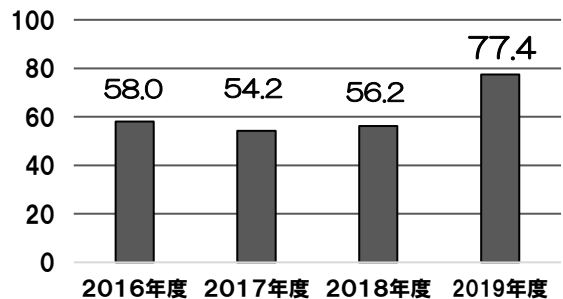
②伝え合う力の高まり

自らの考えを形成する際、文章の中から根拠となる語や文を見つけて、「どうしてそう思ったのか」など自分の考えをノートに書く活動を継続して行ってきた。その結果、教科書や図書資料に書かれている文や資料を基に「教材文のどこからそう思ったのか。」「どこに書いているのか」など根拠をもって伝え合うことができる児童が増えてきた。また、今年度は、学びの必然性が生まれる「問い」や「思考を深める手立て」を工夫してきたことで、児童が主体的に考え、伝え合う姿が多くなってきている。

〈グラフ2〉

学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか

(肯定的な評価の割合)



グラフ2：児童質問紙より

③読書への関心の高まり、読書習慣の定着

読書タイムや親子読書の継続した取組や、学校図書館を使ったり、図書委員会が中心となった読書活動を計画的に行ったりする中で、本に親しみ自ら進んで読書をする児童の姿が多くなった。休み時間に図書館に借り換えに来るのが毎日の日課となっている児童や、昼の読書タイムでは、静かに集中して読書にふける児童の姿が多くなった。本の貸出目標達成率も昨年度よりも8.4%増え、81.2%となり、校内の本の貸出冊数は昨年度より13,741冊増え、今年度は、27,971冊(2020年2月21日現在)となった。

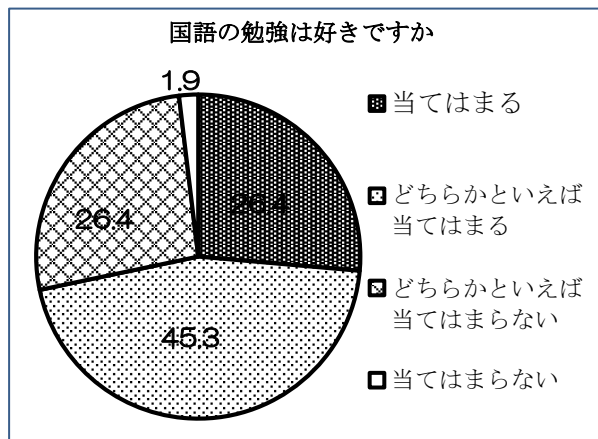
毎日、朝早くから図書館前で本を読む児童や休み時間に図書館に通う児童の姿も多く見られる。〈写真12〉



写真12：早朝や休み時間の図書館の様子

④国語科に対する児童の意識の変化

授業改善に取り組む中で、進んで資料を探したり辞典を引いて言葉を調べたり、教師の指示がなくても自分で考えて行動したりする姿が増えてきた。同時に、授業に対して前向きに参加する児童も増え、本年度の全国学力・学習状況調査の児童質問紙の項目「国語が好きですか」において、肯定的に回答している児童が7割を超え、国語の授業に対する意識や関心も好転している。〈グラフ4〉



グラフ4：児童質問紙より

⑤授業づくりに対する教師の意識の高まり

授業を振り返る際、昨年度から活用している「授業力チェックシート」の「学習指導要領に基づき、何ができるようになるか（育成すべき・資質・能力）、そのために何（学習内容）を、どのように（学習方法）学ぶのかを明確にした、目標やめあてを設定している。」の項目が、年度当初よりも0.5P上がり、3.6Pとなった。また、「児童生徒の知識や考えを広げたり、深めたりするために、図書館資料や新聞等を効果的に活用している」の項目が、3.1Pから0.7P上がり、3.8Pとなった。

このことから、児童が主体的に動く授業の組み立てを工夫したり、国語科以外の教科等でも図書館資料を積極的に活用したりする等、授業づくりに対する教職員の意識が変わってきたといえる。

教師の意識の変化に伴って、児童のふり返りにも変化が見られる。〈資料1〉

- 私は、ハシビロコウのじゅぎょうで、とくちょうを見つけた時にふせんとかをつかうといいことが分かりました。（2年）
- 全ぶ3だんらくで書かれていて、そこに三つのかん点が入っているとわかりました。（3年）
- 友達が教えてくれたり、先生も分かりやすく説明してくれたりしたので、いろいろな言葉の意味が分かった。（4年）
- 自分の伝えたいことに合わせて、資料を選ぶことが大切だとわかった。だから、これからは、自分の伝えたいことに合わせて資料を選びたい。（5年）

資料1：児童のふり返り

⑥課題と今後の取組

全国学力・学習状況調査や標準学力調査で検証していく中で、意味を理解して漢字を使うことができていなかったり、正しい言葉を使って解答してなかったりする児童が多く見られた。今後、基礎基本の定着を図る時間を効果的に活用するなどして、基礎的な知識・技能を習得させる取組を計画的に行い、次学年につなげる力を確実に身に付けさせたい。

また、本校がこれまで生活科・総合的な学習の時間を中心に培ってきた食育の取組と、国語科の学びを関連付けた取組を継続して行い、児童の伝え合う力をより高めていきたい。今後は、他教科等と相互に関連させながら、教科等横断的な実践の開発も考えたい。

【引用文献】

- ・文部科学省「小学校学習指導要領解説 国語編」
2017年3月